

(七) 稲取の子供三番叟^{いなとりさんばそう}

町文化財 昭和五十四年七月指定

稲取の祭りは、七月中ごろに四区の五つ神社のお祭りを同じときに行ないます。そのなかで稲取全体を守る神様として信仰されている八幡神社のお祭りで演じられるのが、稲取の子供三番叟です。八幡神社のお神輿^{みこし}が浜のお飯屋^{かりや}へ行く「お下り^{くだ}」の前後と、お神輿が神社に戻る「お山入り^{やまい}」の前の三回演じられます。

三番叟とは、室町時代の舞である能の演目^{のう えんもく}「翁^{おきな}」をもとにした舞です。三番叟の「叟^{そう}」とは、お年寄りのことで、舞のなかで千歳^{せんざい}、翁、三番叟（稲取では黒面^{くろめん}と呼ばれています。）の三人のお年寄りが演じることや、三番目に演じる三番叟の舞から全体の呼びかたになつたといわれています。

伊豆では、大川^{おおかわ}をはじめ各地のお祭りでは三番叟が演じられていますが、稲取の三番叟は

笛以外の全員を子供が演じることが特徴です。明治時代^{めいじじだい}の中ごろまでは大人が演じていたようですが、その後から子供が演じるようになりしました。昔から三番叟を演じる子供は「神の子^{かみこ}」と呼ばれ、健康に育つと信じられてきました。

稲取でいつから三番叟が演じられようになったかは、はっきりわかっていません。江戸時代の終わりに河津^{かわづ}の見高^{みだか}に來た歌舞伎^{かぶき}の役者^{やくしや}さんから教わったとも伝わっています。

